

鯨番屋

江戸時代から昭和初期まで、北海道の西岸は鯨漁で栄えました。江戸時代の北前船の主要荷物です。鯨は、その7割近くが肥料となり、残りは生食用や身欠き鯨となります。漁期は3月から2カ月ほど。まだ寒い時期に地先の定置網で漁を行い、浜辺の工場で加工します。すべての作業の引き金が鯨の到来です。

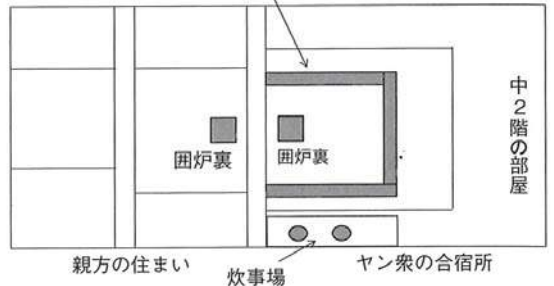
鯨漁を経営したのは大宅おおやけと呼ばれる親方。季節労働者を雇って漁を行います。地元の農家や青森県、秋田県など広い範囲から雇ったようです。また、加工工場では地元の婦人たちも働いており、大きな番屋では200人ほどの労働者がいたとか。ソーラン節は鯨漁の唄ですし、島木健作が「鯨漁場」という小説を書いています。北海道の主要産業だったのでした。このため、当時の番屋や鯨御殿(親方の屋敷や別荘)が北海道の西岸にたくさん残されています。

過日、余市にある国指定の史跡、福原漁場をみることができました。番屋、網倉、干し場、味噌蔵、石蔵、文書倉など、当時をイメージできる建物群が残されています。

驚いたのは主屋の建物。親方家族の住まいと労働者が合宿し、鯨の到来を番する建物です。建物の真ん中を土間の通路で仕切り、裏



板を外せばそのまま食事ができる



▲福原番屋の外観と見取り図

口から向かって左側には親方の住まい。帳場を含め6部屋ほどあります。右側は労働者が合宿する大部屋。中2階が設けられています。たぶん、ここが睡眠場所なのでしょう。30人ほどのヤン衆(労働者)が合宿したそうです。1階はたまり場。中央部通路側には囲炉裏が切れ、それを大きく囲む形で、板を外せば作業靴のまま食事ができるように部屋が作られています。親方の住まいにも、囲炉裏が切られています。労働者を一望できる場所です。労働者側の囲炉裏と親方の囲炉裏は向かい合い、親方は、一目でヤン衆全員の動きを観察できます。ヤン衆の人間関係や思想傾向などを、日常の立ち居振る舞いからとらえ、先達を選び出したり、翌年の雇用を停止したりしたのでしょう。管理者の仕事の中心が部下の観察にあることを思い出させる施設でした。

(MBO実践支援センター代表)

中嶋哲夫の「人事も歩けば」

